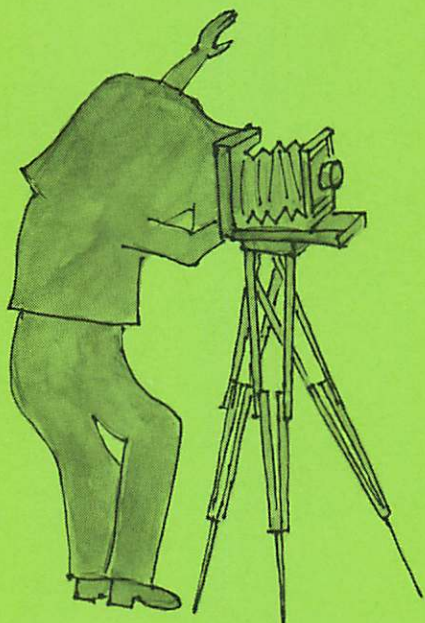


---

尾張町を支えた女たち その捌

---

趣味が新しい本業になった夫とともに尾張町で



表紙絵 村上隆氏(村上洋品店社長・尾張町商店街振興組合副理事長)

## 目 次

はじめに	1
栗ヶ崎遊園での写真館時代を聞いて	2
電話交換機から電車通りに嫁いで	4
交換写真の目の回る忙しさ	6
ふとん持参の押し掛け住込	8
出張撮影や元旦のお客さん	10
枯木橋たもとの尾張町風情	11
成人式写真への移り変わり	14
能楽世界の写真撮影を受け持って	15
新しい時代の写真館技術	17
あとがき	20

## はじめに

目まぐるしく変わる世の中で、ふっと感じる安らぎ。それは、あえて変わらないものに対して覚えるのではないのでしょうか。

急ぐことが効率的、変化することが進歩的。確かに間違っていないのでしょうけれど、これだけでは何か物足りないような。もう少し有っても良いようなものがどこかに漏れている。

長寿社会と言われ出しているこの頃、人によっては、生き長らえことが恥のように思われる節もあったりするけれど。年令を重ねて来たお年寄りの姿を見る時、傍から見ると羨ましい限りです。簡単そんなことが、実は一番難しいとはよくいったもの。価値は、自分で大声で宣伝するものでなくて、にじみ出る体験の積み重ねで人様から評価されるものなのでしょう。

“失敗にめげない気持”を維持すること。

自分の性根の中心を、しっかりと店の商売に置くことを忘れないことのように。そこから、“生き”続けることは、“商い”し続けることにつながって行くのかも知れません。

続ける。“生き”続けることは、単にそこに在り続けるだけのこと以上の素晴らしさがあるようです。何より、本人が気付く以上に豊富な試行錯誤から来る層の厚い実績には、昨日今日の実績が遠く及ばないものがあります。勿論、長い時間の間には、人に言えないような失敗もあることでしょう。けれど、失敗がない限り、どうしたら成功するかへの反省も生まれず。数限りない失敗と、それ以上の成功の積み重ねがあってこそその“続ける”ことの連続があるのでしょうか。

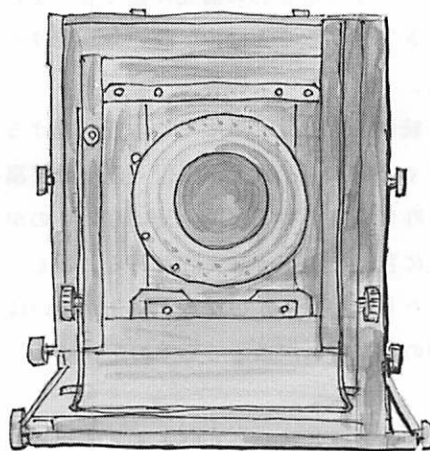
尾張町の店には老舗が多いと言われています。けれども見える部分の陰で、こうした“支え続ける”たゆまない努力があってこそその老舗の維持なのです。

今回も、そんな気持をしっかりと持った媼(おうな)に話を聞かせてもらうことで、大切なものを再発見させられるようです。

### 粟ヶ崎遊園での写真館時代を聞いて

うちのお父さんは、小さいころから今の仕事をしていたんやない。犀川の向こうで手広く塩や干魚、肥料、佃煮などの商いをしている家のオアンサン(総領息子)に生まれていたとか。何や、銭屋五兵衛に遠く血がつながるなんて聞かされるんは、やっぱり金沢なんかね。

どちらかという、おじいちゃんとおばあちゃんっ子。年の近い叔母たち女ばかり4人の中に育った男だけに、お茶やお花やお琴の稽古事をしている姿を見て育ったそう。一人でコツコツと好きなことを積み上げる性格もうなづける。いつの間にか趣味の良い、身の回りの品も割合自由求めていたようで、当時としては珍しいイーストマンの箱型写真機を持っていた程やから。



それかどうかは知らんけど、昭和5年の大恐慌のころを境に、代々続いた店の権利を番頭さんに譲って、とうとう自分は好きな写真の道を選ぶことになっ

たんやて。最初は、高岡へ修業に出掛けてから、金沢で1番の技術やと評判の  
写真館に勤め、やがてその粟ヶ崎遊園の店を任せようになる。そうして、  
結局は店を引き継ぐ形で初めて一人立ちするようになって……。やっぱり、  
趣味とはいっても、充分に身を立てる程の技になっとったんやね。

勿論、もともとの店の方も佃煮屋として繁盛しているのは、人ごとならず悪  
い気はしない。



あの頃の粟ヶ崎遊園ゆうたら、そりゃもう大変なもの。開園に合わせるよう  
に浅野川電鉄が開通したくらいやから。連日、家族連れなんかで、押すな押す  
なの賑わい。新聞なんかにも楽しそうな人達の写真が載ってて、早く行ってみ  
たかった。ちょうど尾張町界限は、お城の中にあった歩兵七連隊が1年ばかり  
野田へ移り、兵隊さんの姿が少なくなって、しばらく寂しくなった大正14年  
の頃だけに。兵隊さん相手に写真を写していた大手門の前付近の写真館さんな  
んかは大変なことやったやろ。

電車の中は、着物姿だけでなく、ハイカラな洋服を着た人もいて、乗るだけで楽しくなるような。“北陸の宝塚”といわれた華やかな少女歌劇団が開催され、娘ごころにも浮き浮きしたわ。お尻が焼ける程の大山滑り台があった遊園地やろ、それに動物園、お土産の卵せんべいを下げながら持って帰るのが嬉しかった。確か、すぐ近くの金石には水族館やら、大きなお風呂のある滝々園(とうとうえん)もあったね。

そりゃもう、うちのお父さんの写真館が繁盛せんわけがない。少女歌劇団のレビュー・スターをプロマイド写真にしたり、記念写真を撮ったり。忙しゅうて忙しゅうて、と何んだかいつ聞いてもゆっくりした時がなかったみたいに聞かされた。

#### 電話交換機から電車通りに嫁いで

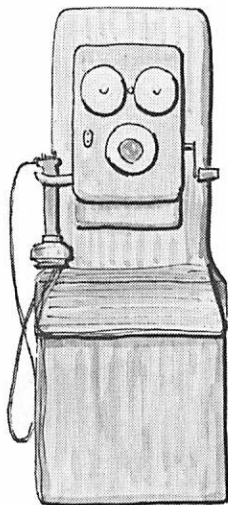
尾張町生まれの尾張町育ち。他所からここへ嫁いで来るお嫁さんなんかは初め、電車が走っていたり、あんまりの人の多さにびっくりしてしまう。けど、それが当たり前やと思うとる私には、特別な珍しさもなかったし。ただ、いつの間にやら、気持はハイカラ娘になっていたんかね。

三人姉妹揃っての賑やかな家庭の中で、花嫁修業だけではもったいなくて、お勤めに出てみたのもそんなことかしら。あんまし、女の人が職を持つのが珍しかった頃やさかい、知らないところで名物になっていたかもしれん。でも、毎日はずっとも楽しかった。

あのロボットの顔をしたような電話機のハンドルをグルグルと回して「こちらは261番ですが、333番をお願いします」と妙に奇麗な外向きの声で言われて、電話交換機のプラグを抜き差しする。この声の人はどんな顔をしているんやろう。尾張町の通りで直接この目で見える人達と違うて、想像だけでいろんなことが思い浮かぶ。普通の生活だけでは知ることが出来ただけに嬉しくなるような。

というてもあの頃は、電話が使われ出したばかりやっただで、尾張町やらのちょっとした大店や料亭、病院やお役所さんとか、限られた人しか持ってなかつ

た。今のように、持って歩く電話機まで出来て、一人に1台なんてのは考えられん時代。



中でも“長(ちょう)電話”の権利を持っている人は少なかった。長いこと話を出来るんでなくて、遠方の長距離電話を掛けられることに価値があった。今の市外電話というてしまえばそれまでやけど、そんな遠くまでお客さんや、仕入先を持つ大店は、やっぱりこの限界が多かったようや。

そうこうする内に、うちのお父さんとの縁を取り持ってくれる人が出て来て、同んなじ町内をずるようにして嫁いだ。あの頃は、下火になった粟ヶ崎遊園から白銀町、裁判所前と店を移して、尾張町に来てから3年目の慌ただしい毎日の連続。ゆっくり新婚気分を味わうどころでないほど。昔は、新婚旅行もなかったし、そんなもんやと思うとったけど。

ちょうど、福井の大地震があって、何やら女手ばかりの家におっても心細うなるような昭和23年のこと。やっぱり、大黒柱の男の人がいるといたのでは



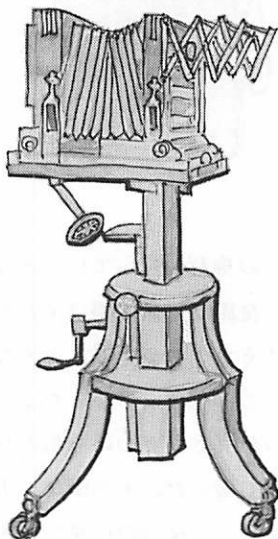
大違い。

親許もすぐ見える処やし、何より電話交換機も写真機も同んなじような機械やさかい、何んとかなるやろ。と、何も知らない、恐いもの知らずの気持。気楽すぎたんやね。

今でこそ、冷や汗の出る思いや。知っとったら、とてもとても……。

#### 交換写真の目の回る忙しさ

どうして、あんなに忙しかったんやろ。今のようにカラー写真でなくて、白黒写真だったもんで、写すだけでのうて現像から焼き付けまで全部してたからなのかしら。



何しろ、口こみで写真映りの良さが評判だったもので、流行の交換写真などを写してもらいたいという人が行列を作るほど。白銀町の時代なんて、交通整理の人が出たとか。どこに居ても手狭になるもんで、どうせなら一番の繁華街

の尾張町に店を構えれば中途半端でないから、どんなにお客さんが来たって大丈夫やろう。と思うたんかしら。

今思えば、うちのお父さんが居ったからこそ出来た写真の手伝い。右も左も分からんでも、一つ一つの写真道具に対する愛着、それを使ってお客さんを大事にする姿。お金儲けよりも、自分の技術を真っ先に考える人やった。根っからの職人根性を持った人なんやね。

娘時代は、買い物に行っても駆け引きして値引きしてもらうのが当たり前やった。ところが不思議なことに、ここのお店に来るお客さんは、ちっともそんなこと言わん。どこにでもあるもんとか、誰でも出来るもんでないから、値があると思うて値引きせんのと、後になってから気付いた。そやさかい、回り道してるようでも、お金はちゃんと巡って来てた。ありがたいことや。

その代わり、本当にのんびりする暇はなかった。娘時代の方が、どんだけ自分で好き勝手しとったことか、身にしみたのも後のまつり。出来上がってしまった写真だけを眺めていればそんなことは感じないけど、お客さんに見えない所でする仕事の多いこと。

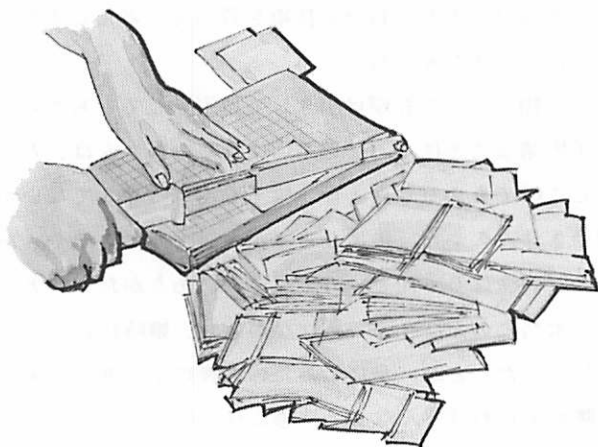
「早く早く、写して」

そしてから、「一体、いつ仕上るんや。どんな風に写ってるんか、すぐに見たいから」

言う方は、待ち遠しくて喋べるだけやさかい楽やけど、こちらはそんなものでない。昼間、行列をついていた人達を写した写真のネガを現像液に浸けたり、印画紙に焼き付けたものを乾かしたり。勿論、お金を戴いてるから失敗は許されないし。

流行の交換写真なんかやと、お客さんの来る時期は一緒くたやし。何しろ、卒業アルバムも作ってなかった頃やさかい、学生さんなんか親友同志で交換するために、何枚も焼き増しを頼むから。ちょっとは人目の良い顔に修正してあげようとする、また手間が増えたり。そこいらへんの手の込んだ仕事のいる所は、うちのお父さんやら、住込のお弟子さんがしてくれたけど。私は私で、出来上がった写真をキチンとした大きさに切る仕事に追われて、手がダヤク（

だるく)になってしまう。



本当は、奥でご飯の用意もせならんのに。よわった、どうしよう。

ただでさえ、手が遅くて、人の倍かかって家事やら店の手伝いをしているから、どんどんすることが溜まってしまう。

#### ふとん持参の押し掛け住込

そりゃ、この忙しさの中で手伝ってくれる人がいるのはありがたい。けど、こっちが頼みもせんのに、「先生、給金も何も要りません。お側に置いて戴けるだけでけっこうですから。是非、お仕事を目の当たりに見させて下さい」なんて言いながら、弟子志願を兼ねてふとんまで持参して押し掛けるのには、どうしたもんやる。

つい気を許してしもうと、食いぶちがどんどん増えてしまうし。というて、

つっけんどんに断ってばかりでは、どんな所からせっかく繁盛している店の評判を落とすことにもなるし。ま、うちのお父さんがこの男なら、と目利きをしてくれるんやけど。

蝶よ花よと持て囃される大店のオアンサン(総領息子)の座から、一転して今の店を自力で作った人の限力。興味本位の人には怖い目付きやったやろし、本当に性根の座った人からは頼もしく見えたことやろ。

「よしっ!」の一言で、やっと住込みさせてもらった子の嬉しそうな顔。「ここに寝まっし」と、部屋に案内して初めて、あんまりの荷物の少なさに驚かされる。女だったら、とでもこんなものだけで済まない。本当にふとんと枕、それに着替えが1〜2枚もあるかなしか。ご飯を食べるお茶碗も持ってない。思い詰めて、この店へ来た気持が伝わるようで、胸が一時熱くなる。

45年になる番頭さんも、店の戸を叩いて許されたのは18歳の時とか。

店では、修業を兼ねた勤めやさかい、今どきのお勤めのように決められた時間の中だけ仕事すればそれで終りなんて思うてない。わき目も振らずに、一刻も早く仕事を覚えよう。悪く言うたら、うちのお父さんの技術を盗むくらいの根性を持って。

いくら忙しくても年中忙しい訳やない。夏場なんかは少し店に余裕が出来ることがある。するともう、うちのお父さんにいろいろと写真について聞いて来る。普段は、じっとうちのお父さんのすることなすことを、横からじっと思ったり、言われた作業をするだけなのに。一体、いつの間にあんなに勉強しているんやろ。

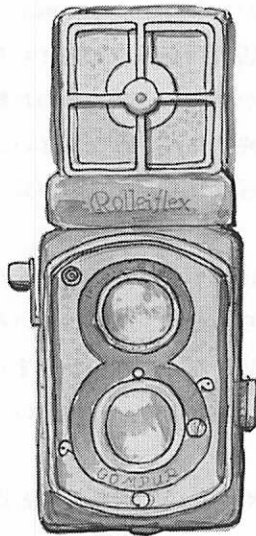
聞かれた方も、根が技術屋やさかい、あれこれと返事をしたり、こうしたら良いと指示したり。言葉だけでのうて、実際にそこらへんにある写真機を手にとって動かしてみたり。そりゃもう、時間の過ぎるのもお構いなし。

でも、ご飯の支度をしている私はどうなるの。せっかく炊いた暖かいご飯が出来てますよ、と何度言っても空返事ばかり。男の人っちゃうもんは、熱中すると食べるのを忘れてしまうんかしら。台所の後片付けだって、これではいつになることやら。

### 出張撮影や元旦のお客さん

店では、どんなに写真道具が大きく、重くても構わないけど、出前というんか出張撮影のときは大変。自転車の横に、一杯の荷物を付けてタイヤが半分ベシャンコになる程になってまでして行く。そんな、うちのお父さんの行く後ろ姿を見ると、ちょっと涙ぐんでしまう。とりわけて、体が人一倍丈夫な訳でもないのに、何もあんなに無理せんでも。

心配する私の気持とは裏腹に、自分が好きで始めた写真の仕事やさかい。という“張り”が物事を前に進めるんかしら。逆に、私の方が「そんなつまらんことをグズグズ言うもんでない」なんて叱られるんでは、何をしているんやろう。



自分で商いするというんは、外見(そとみ)からだけの仕事のキツサ以上に、気持の持って行き方次第で、辛そうに見えることでも楽に感じるんかね。お勤

めしている時には、考えられんことやった。

そやから、元旦で誰もが休んでいる日に、表の戸をドンドンッと叩いてお客さんがやって来ても、うちのお父さんは嫌な顔ひとつしたことがない。自分の好きな写真が写せるし、技術を磨く機会が出来た。こんな日にまで来られるんやから、それなりに良いと思ったからのはず。その上にお金まで頂けるんやから、の気持なんやね。見ると、写真機を構える顔が笑顔になっている。

何もこんな日に、と思う私も、いつの間にか

「お客さん、こちらで、ほら顔を半分だけ横を向けるようにポーズを取って下さい」なんて、言っている。

仕事が一段落した夜なんかは、好きなお酒を晩酌で上機嫌なうちのお父さん。今日の昼間は隣の福井県から、わざわざお客さんが来た日やった。きっと遠方から来てくれて嬉しかったんやろ。もう1本、つけてあげようかしら。

そういえば、毎年、必ず来るお客が何組かあった。ここの店の写真でなければ気が済まない。初めの頃は、ご家族の一人として。それからお二人の写真、小さな赤ちゃんを抱いた三人、大きな子と小さな子の四人で、やがて親と同じような背をした子供達と.....

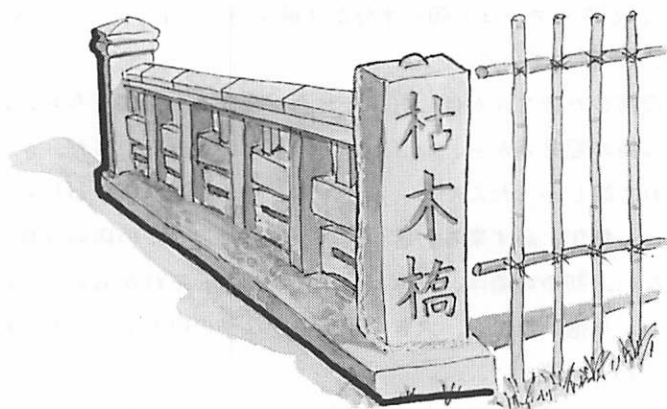
人様の写真の写り具合の変わりようを見ながら、私達も変わるのが当然なんやと思ひ出させられる。

#### 枯木橋たもとの尾張町風情

私が生まれたのも、お城の大手門の前の中町通りで分けられたこっち側になる”下(しも)尾張町”。嫁いだ先も、同じ”下尾張町”。女の身で、そんなにあっちこっちと動き回とらんので、同じ尾張町でも中町から向こうの”上(かみ)尾張町”のことはあんまり知らん。

けど、上よりも下尾張町の方が、江戸時代の参勤交替の行列がよく通ったというんで、格式が高いと筆屋のご隠居さんに教えられたこともあった。漬物みたいに臭いの強いものを、店の前に出してはいけない。お殿様にご迷惑が掛かるからなんて、本当の話かと思うくらい。

それに、ここの店の前には、明治維新の直ぐ後に建てられた里程元標も立っているし、枯木橋なんて古い謂れの赤戸室(あかとむろ)石の橋もある。普段、何気なく見ているけど、改めて見直すと。おろそかに出来ん処に住まわせてもろうとするもんや。



この大通りを歩く人は、多分そんなものよりも、お目当ての店に並んでいるものを見るのに手一杯なんやろう。懐中時計やったら、あのトッケイ(時計)屋。洋服なら、そこの洋物店が一番。お客さんの夢を適えるような店先の華やかに比べて、うちのお父さんのようなご主人を立てるのに、どこの店でもオカッツァン(おかみさん)は奥でキリキリ舞いしてるみたい。

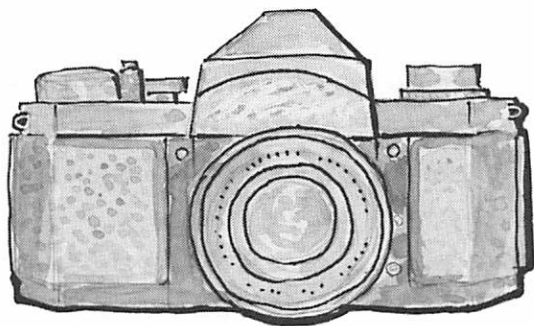
それこそ、陽が出るか出んかの朝の早うから、上尾張町の合羽屋のオカッツァンなんかは、紙合羽を干しに浅野川の河原ヘリヤカーを引いて行くし。すぐ近くの毛糸屋さんでは、夜遅くまでおじいさんとおばあさんが毛糸のヨリをつむいでいたし。

そやさかい、昼間はめったにお互いの顔を見たことがない。朝早うか、夜うさり遅うになってからでないと挨拶せんもんで、薄暗くて誰か顔がよう分からんこともある。

あれっ、今おじぎをして行ったのはどこの誰だったかしら。と思いながら、私も考えるより先におじぎをしている。こんな時間に丸髻結うて、前垂れ付けて、せかせかと歩いているんは、どっか近くの店のオカッツァンに違いない。

尾張町の人は、お客さんや、人前ではいっばしの恰好をしているも、皆んな働きもの。人の見えなところで、一所懸命に頑張っているからこそ身代が支えられとるんやろ。

でも、皆んな顔は生き生きと輝いとったね。うちのお父さんがあんなに一所懸命に頑張っているのに、私だって。一緒になって体を動かしていると、余分なことに目を奪われんで済むし、不思議な力が湧いて来るもの。辛いなんて思いは、頭の中に入ってこない。





## 成人式写真への移り変わり

時代が移るのはちっとも待ってくれん。ついこの前までは、交換写真といって騒いでいたのに、立派な卒業アルバムが出来始めるとバツタリお客さんは来なくなる。代わりに、成人の日というもんが昭和23年の7月に他の祝日と一緒に決められてからこっち。それを記念して写す人が年とともにだんだん増えて、いつの間にか、また店の前に列を作り出すようになった。

近頃は、それに加えて七五三の可愛い子供の晴れ姿を写す人も列を作るようになり出した。ひょっとしたら、こっちの方のお客さんが多くなってるかも。

写真も白黒からカラーになっていた。写真機自体もそれ程高くもなくなって、皆んなが持ち始めるようになった頃だけに、ありがたかった。写真館というんは、そりゃ立派な撮影道具を揃えるのも大事やけど、やっぱり写す技術が一番大切なんや。道具はお金さえ出せば揃えられるけど、お金で揃えられないモノを持ってないと、人様が重宝する商いが出来ん。

私ゃ、奥のことで手一杯やから、店のことは知らん。なんて言われてられない。ご飯こしらえの最中もお構いなく、大きな風呂敷包みを持ったお客さんがやって来る。中身はどっさりと着物が入っていて「奥さん、着付けお願い」と頼まれると、出来ませんなんて言えない。

今は美容院なんかで着付けをしまさるけど、あの頃は写真館へさえ行けば、当然してもらえるもんやと思われてた。最初は、見よう見真似で取り繕っていても、いつまでもそれで済むものでない。「結婚してるのに、そんなことも知らんで!」と、言われるのを覚悟で美容院で教えてもらったり。また綺麗に写るポーズはどうしたら良いかと、他の写真館さんが店先に飾ってある写真を、こっそり見に行ったり。

その気になってみると、シャッターを切るうちのお父さんの言うままに動いているだけでのうて、いろんなことが全部勉強になる。若い女の人の着物姿の横から、ちょっとだけ帯が見えるようにするには、どういう風に写真機の前で立ってもらったら良いかしら。

少しでも良い仕上りになってこそ、うちの店の値や。

「お陰様で、お見合いがまとまって、式の日取りも決まりました。今度は、新婚夫婦の写真を写しに来ますから、その折は宜しく」

なんてお礼を言われると、本当に嬉しくなる。ただ写ればいい写真と違うからこそ来られるお客さんなのだから。さあ、この次は、もっともっと勉強して良い写真になるよう、うちのお父さんの手伝いをしなきゃ。

### 能楽世界の写真撮影を受け持って

難しいことは分らんけど、金沢っちゅう所は“加賀宝生”と地元で言われる位に宝生流の能楽が盛んな土地柄なんやね。そりゃ、能楽までするには、お衣装も揃えないかんし、笛や太鼓の先生、地方(じかた)の謡う人達に来てもらうという具合に、一通りのことをすると随分と物入りになる。

そこまでせんでも、謡だけやったら、ちょっとした時間の手間さえ都合を付けられれば、たいして稽古代金も使わずに気楽に始められる。教えてくれる先生も、この辺ではたくさん居るし。

うちのお父さんも、昔、少しは稽古したというし。長男になるともう、すぐ近くの能楽の大先生の社中に入って、いつの間にか30年になるかしら。あの世界は理屈で物事を図るんでなくて、長い間に渡る稽古の積み重ねが大事なんや。尤も、仕事が第一やさかい、謡の上達の方は人様よりゆっくり目なもの仕方ないか。

でも、能楽のころ粹(いき)だけは、シッカリとつかんでいるみたい。そやから、前からずっと能楽の写真撮影を請負っていた方から、この仕事を譲られたのもその辺みたい。ただ撮影するだけでなく、この世界の中で稽古しているから、きっと上手く写せるようになるはず。年を取った儂の代わりに、後を頼む。と、託されたのだという。

最初は、おそろおそろ。人様にも言えないような失敗を繰り返していたんやと思う。そのうちに、自分が稽古していることと、だんだん結び付いて来たよう。

あの宝生流「岩船」の曲やったら、「なが居もめでたき〜」でシテ(主人公)が橋懸かり(鏡の間といわれる控えから能舞台への屋根・欄干のついた渡り廊下)で見得を切る。その時をあらかじめ狙ってシャッターを切れば、写真に残せるようなポーズが決まるんや。と、何度言われても、私にゃ分かん。けど、さすがにうちの人の長男だけある、確かに良い写真には仕上がっている。能楽のことを知らん人が見ても、これなら.....。あんまり誉めると、あの子が舞い上がらんでもないから控えとるけど。



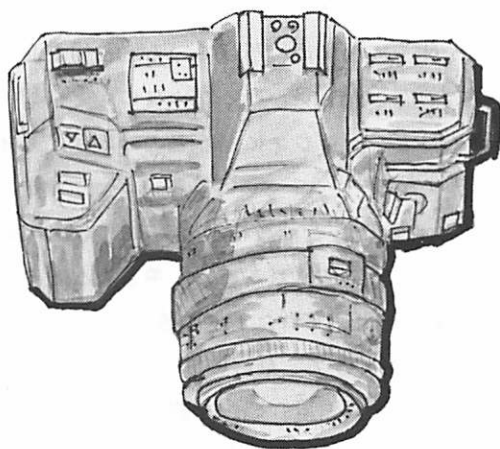
能楽堂とか舞台関係は、思うた以上に苦労が多いみたい。演技中は、客席は暗く、舞台だけが明るい状態になる。普通、写真館のスタジオだったら遠慮せずにフラッシュをたくのに、舞台ではそんな訳にいかん。能面に映る幽玄の影が消えてしまうし。何より能面を被っている人が、やっと見えている小さな目の穴を瞬間的に真っ白にして、見えなくしてしまう。

また、いつもは聞こえ難いシャッターの音も、静かな舞台では意外に大きく

聞こえて邪魔になってしまう。いきおい、音が喧しく感じられない、客席の後ろの薄暗い所で写真機を構える。当然、だからフラッシュは使わない。写真機のレンズも明るくて性能の優れたものを用意する。写す姿も、舞台からは目立たないようにして、まるで隠し撮り撮影みたい。ま、それだけ演能者に気を使うことで、伸び伸びと舞台をしてもらう。

どうしたら、最高の演技が出来るんだろう。人様の魅力を精一杯出してもらうように努力する中で、お互いの気持が合う所で、写真を写させてもらう。どうも、自分が、自分がでなくて、写されるお客様のこのころもちを配慮する写し方が大事みたいやし。うちのお父さんから長男へ、いつしか伝わっていることのように。

#### 新しい時代の写真館技術



ここ最近、写真機の性能は信じられない程に変わった。何んもしなくても、

機械が全部ピント合わせまでしてくれる。写真機の操作が難しいということは、もう誰も言わない。写したいものに集中さえすれば、後は人の手が入らなくなるんでは、と思わされる。それはそれで、写真を皆んなが楽しめるようになったことで、素晴らしいことなただけど。

うちのお父さんと一緒にやって来た私なんかには、中身が分からない機械になってしもうて、何んだかもう付いて行けない。それに比べて長男の嫁なんかは、私のような手伝いだけと違って、「はい、ポーズ」なんてしながら、ちゃんちゃんと写真機も使って写せる。6年前に、この写真館もビルになり、私の隠居部屋も作ってもろうて、楽隠居の生活の毎日。放っといても、新しい世代が切り盛りしてくれる。

室戸台風が能登半島沖を通過して、金沢でも大きな被害が出た昭和36年。写真学校から帰って来たばかりの長男が、今では私をずっとずっと越えてしまったみたい。

思い立って始め出した“金沢のお嬢さん・百人展”も、今年でもう6回目。お金を取らずに一人ずつ600回、ということは600人のお嬢さんにフィルムをまるまる1本ずつ使って小まめに写している。長男が自分なりの写真技術を磨くことと、将来のお客さんを見つけるためなのだと思う。

加賀美人といわれるけど、スタジオに立つどのお嬢さんも本当に美しくて、可愛い。そんな方々から、

「撮影の時、先生が“いいよ”と言われるたびに、本当に自分が良くなって行くような.....シャッターを切られる毎に、美しくなるみたい」

「まるで、不思議な魔法を掛けられたような感じで」

「超一流のモデルになったようで、最高の気分」

「ありがとうございます」と、素直な感想を聞かされると、

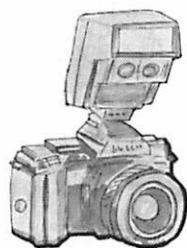
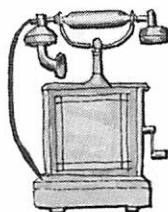
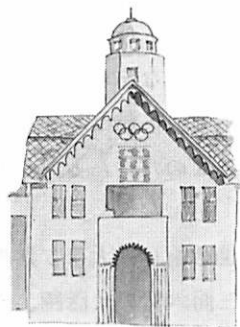
こんなセチガライ世の中だと考える一方、そやからこそ忘れていけないことをさせてもらっているんやなあ、と感じさせられる。

去年、同じように写真学校から帰って来た孫が、「親父、何してる」という顔をしながらも、夜遅くまで親子二人で起きている。伝えたいこと、反発したい

こと。ぶつかりあいながら、通じ合うものを持って、勤めている人のように時間を区切らずにいつまでも、夜の更けるのも構わずに。

機械が便利になればなる程、実はそれを扱うのは、暖かい血の流れる人の手のはず。うちのお父さんにとって、それが出来るのは写真の世界と思って踏み出したのだし。長男も、いろんなことをしながら、そろそろ気付いている。さあ、次は孫の番かしら。

お金儲けを真っ先に考えるよりも、いつまでも大切な人のところを写し続けて行ってもらうことが、私の願い。



近岡清子・媼(おうな)について

明治四十一年二月九日生。昭和二十三年に同じ尾張町の写真の光画社に嫁ぐ。オアンサン(総領息子)の身から趣味の写真技術で店を開いていた夫を助け、慣れない写真機のイロハから手伝う一方、奥の仕事もこなし、店の信用に貢献す。

あとがき

ともすれば、お金儲けのための商売が流行る昨今。忘れてならないところ料(いき)を持ち続けることに価値を見い出して欲しい。と感じるのは私だけでしょうか。

これでもか、これでもか、という商業姿勢に対して、そろそろ嫌気がさすようです。そんな短絡的な手法の価値転換をして、お金は後からついて来る！くらいの自信を持ちたいもの。

今回の話を聞きながら、自分の旦那さんのする仕事に絶対の信頼を置く姿。うちのお父さんの技術は、誰にも負けないものを持っている。この技術を生かすように、私が全身全霊を持って助けて行き続けさえすれば。多少のことはあっても、きっとお客さんはこの店を認めて戴ける。だから、一所懸命に付いて行こう。

あまりに目先のことを追い掛け回すことの対局には、こんな忘れてならないことが見えなくなっていたのではないのでしょうか。改めて、商いは“物売るだけ”でなくて、実は“人のところを橋渡しする”ことなのだったと気付かされたことです。

何より、旦那さんの仕事を理解し、押し掛け住込の世話をし、大事な跡取り息子達にも将来へ対しての気配りを忘れない。まさに三面六臂の大活躍。健康でなければ出来ないこと。

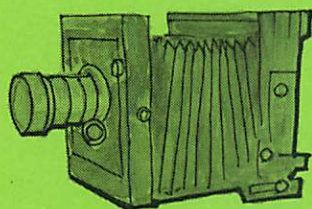
忙しすぎて、病気になっている暇がなかった。と、言う本人の顔は、苦勞話をしているはずなのに、何故か笑顔に満ちている。後に物事を回さず、その時に出来ることをすぐ始末してしまう。やり残さないことが、後々までも後悔するような気持を起こさせないのでしょうか。

要は、物事を前向きに考えて、決して後向きにならないこと。仮に、後向きであっても、前向きに解釈するくらいが、ストレスも溜まらず、こころ楽しく過ごせる秘訣なのか。教えられることの多い、お話しであったことに感謝をするだけです。

《《 さし絵の説明 》》

項	目	内 容
○ 表紙		「卒業式等の写真屋さんの 黒布を被った姿」
<目次>		
○ 粟ヶ崎遊園での写真館時代を聞いて		「箱型の写真機」 「粟ヶ崎遊園の全景」
○ 電話交換機から電車通りに嫁いで		「昔の電話機」
○ 交換写真の目の回る忙しさ		「明治期の蛇腹式写真機」 「交換写真を名刺大に切る作業」
○ 出張撮影や元旦のお客さん		「二眼レフ写真機」
○ 枯木橋たもとの尾張町風情		「枯木橋たもと付近」 「110フィルム用の写真機」
○ 能楽世界の写真撮影を受け持って		「宝生流能舞台」
○ 新しい時代の写真館技術		「全自動写真機の草分け α 7000」 「粟ヶ崎遊園の入り口」 ・ 昔の電話機 ・ ストロボ付一眼レフ写真機」
○ 裏表紙		「明治初期の蛇腹式写真機」





発行 = 1995年 9月吉日

著者 = 石野 琇一

さし絵 = 村上 隆

発行所 = 金沢市尾張町1丁目11番8号

尾張町商店街振興組合

尾張町若手会